

第 171 回
立教大学チャペルコンサート
Chapel Concert

「ホルンとオルガンのマリアージュ」

ホルン 島方 晴康
オルガン 崎山 裕子

2025 年 10 月 11 日(土)
開場 13 : 00 開演 13 : 30
立教学院聖パウロ礼拝堂

主催：立教大学
※会場内での飲食・撮影・録音はご遠慮ください。

「ホルンとオルガンのマリアージュ」

ホルンは角という意味でそこから角笛とも呼ばれる、狩りの時に使われた金管楽器です。オルガンは一見すると鍵盤楽器ですが、金管や木管のパイプを風箱から送られる空気で鳴らす管楽器で、ホルンと同じ管楽器でもあることを、オルガンを弾くようになって気づきました。

国立音大在学中の4年間、島方氏のピアノ伴奏者を務め、ホルンの伴奏法を学びました。ホルン科の千葉馨教授(通称・バーチ)のレッスンは、時には歯が腫れるほど緊張しましたが、思えばとても貴重な時間でした。青い壁のご自宅へレッスンに通ったことを思い出します。

島方氏とは卒業以来、数十年ぶりの共演です。ぜいたくな響きの聖パウロ礼拝堂に溢れる、私たちにとって初めての、ホルンとオルガンの共鳴をお楽しみいただければ幸いです。

— プログラム —

オルガン

Praeludium in Es BWV 552/1

前奏曲 変ホ長調

Johann Sebastian Bach (1685-1750)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

この曲は、1739年に出版された「クラヴィーア練習曲集第3部」というタイトルの、バッハが晩年に書いたオルガン曲集の冒頭に登場します。この曲集は教会の教義に則って礼拝の式次第の通りに曲が続きます。3部形式の前奏曲は「威厳ある父なる神」、「子である寛容なキリスト」、「降臨する聖霊なる神」の三位一体の神を顕しているとされ、それはフーガにも踏襲されています。祝祭的な響きから、結婚式の前奏として弾かれます。

ホルンとオルガン

Wachet auf, ruft uns die Stimme BWV 140

起きよと物見の音がする

Johann Sebastian Bach

J. S. バッハ

バッハが教会カンタータからオルガン用に書き換えた6曲を「シュープラー・コラール集」と言います。その第1番が有名なこの曲。歌詞の中の「花婿(クリスマスに生まれる救い主イエス・キリスト)が来るので、花嫁(人間)は起きて明かりを取り、迎えよ!」という言葉から、本来の意味とは異なりますが、結婚式で弾かれることがあります。本日は、オルガン譜ではなく、テノール歌手がコラールの旋律を歌うカンタータの楽譜でホルンと演奏いたします。

オルガン

Fuga in Es BWV 552/2

フーガ 変ホ長調

Johann Sebastian Bach

J. S. バッハ

先ほどの前奏曲と対をなすフーガは「聖アン」という聖歌の旋律が最初に登場する、壮大なフーガです。3部形式は前奏曲と同じく三位一体の神を顕し、5声のポリフォニーが、宇宙的な深奥をずしりと伝えます。変ホ長調は「美しく荘厳な調性」として当時の音楽家には未知の響きであり、バッハは最先端の調性をあえて選んだのです。

ホルンとオルガン

Andante from ‘Symphony No. 5 “Reformation”’

アンダンテ～『交響曲第5番「リフォーメーション」、第3楽章』

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809-1847)

フェリークス・メンデルスゾーン・バルトルディ

メンデルスゾーンの交響曲第5番「リフォーメーション」は宗教改革という意味で、この第3楽章の後には、次に演奏する「神はわがやぐら」のコラールの旋律がフルートによってしっとりと登場します。このコラールは、宗教改革者マルティン・ルターが作詞作曲したもので、プロテスタント・ルター派教会の誕生日でもある10月31日宗教改革記念日を記念する礼拝で必ず歌われる、定番の力強い賛美歌です。

オルガン

Ein feste Burg ist unser Gott

神はわがやぐら

Friedrich Wilhelm Stade (1817-1902)

フリードリヒ・ヴィルヘルム・シュターデ

Ein feste Burg ist unser Gott

神はわがやぐら

Emil Dercks (1849-1911)

エミール・デルクス

交響曲第5番第4楽章に登場する「神はわがやぐら」のコラール変奏は、メンデルスゾーンと同じ19世紀の教会音楽家によって書かれました。

ホルンとオルガン

Romance Op. 36

ロマンス

Camille Saint-Saëns (1835-1921)

カミーユ・サン＝サーンス

ホルンのソロ曲として最も演奏される曲である「ロマンス」を、音大時代はピアノで伴奏しました。オルガンはペダルがあり、弦楽器のような音も備えているので、ホルンの柔らかい音色とブレンドするのではないかと思います。サン＝サーンスはパリのマドレーヌ寺院のオルガニストを務めながら、作曲家として名を馳せ、数多くの作品を残しています。私たちがよく耳にするのは「動物の謝肉祭」の「白鳥」ではないでしょうか。

オルガン

Fugue sur le thème du Carillon des heures de la cathédrale de Soissons Op. 12

ソワッソン大聖堂のカリヨンの主題によるフーガ

Maurice Duruflé (1902-1986)

モーリス・デュルフレ

デュルフレはオルガン音楽全盛期のパリを代表する卓越した音楽家ですが、自ら完璧だと認めた作品のみを出版したので、合唱曲も含め14曲しか残していません。1962年に書かれたこの曲は、パリの北東に位置する町ソワッソンに聳える大聖堂の塔から流れてくる、時を告げるカリヨン(鐘に繋がる鍵盤をたたいて演奏する打楽器)の旋律をモチーフにして、最後はそれがガラガラと町中に響きわたっているかのような祝祭感にあふれています。

ホルンとオルガン

アンコール： 浜辺の歌

作詞：林 古溪 作曲：成田 為三

編曲：外山 雄三

オルガン譜編曲：崎山 裕子

ある日、島方氏がこの曲を北海道で演奏したいと思い千葉先生にお伺いを立てたところ、ピアノ譜を書いた外山雄三氏に「直接、許しを得よ」と言われ、ドキドキして外山宅に電話をしたそうです。NHK 交響楽団の指揮者を務めた外山氏は、東京音楽学校(現・東京藝術大学)で同級生だった千葉氏のためにこの曲を含め6曲のピアノ伴奏譜を書き下ろし、千葉先生の演奏で CD になっているそうです。

プログラムノート： 崎山 裕子

島方 晴康 (しまかた はるやす)

東京都出身、国立音楽大学器楽科でホルンを千葉馨、大阪泰久の両氏に師事。在学中の4年間、ホルンの伴奏者だった崎山裕子と共に学ぶ。卒業後、フリーランスとして活動した後、ウィーンに留学し G・ヘーグナー氏に師事した。テアター・アン・デア・ウィーン劇場管弦楽団に首席奏者として入団し、3年間の活動を経て帰国。札幌交響楽団に副首席奏者として入団、本年6月に約35年間の活動を終え退団。現在はオーケストラの客演奏者として演奏する傍ら、札幌大谷大学、北翔大学で非常勤講師として後進の指導にあたっている。

崎山 裕子 (さきやま ゆうこ)

東京都国立市出身。国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業後、オルガンに転向。聖グレゴリオの家宗教音楽研究所本科(3年)でオルガンと教会音楽を学び、1993年スイス・バーゼル音楽院へ留学。ギ・ボヴェ氏に師事し1997年、最優等を得てコンサート・クラスを修了。その後、米ボストンのニューイングランド音楽院へ短期留学し、故・林佑子氏に師事。1998年に帰国。2003年、立教学院オルガニストに就任し、学院の式典や礼拝の奏楽、オーガニスト・ギルドの指導者を務めている。